



文学における日中のかかわりは、文学の担い手に着目して四期に分けると理解しやすい。

第一の奈良・平安の担い手は、学者、文人を中心とした貴族である。この時期に編まれた漢詩文集『懷風藻』や三種の勅撰漢詩文集は、六朝や初唐の王勃、駱賓王の影響が色濃く表れており、文は四六駢儷文が主流で、『古事記』序文や『懷風藻』序文をはじめとして四六駢儷文で書かれたものが多い。詩文制作にあたっては、遣隋使、遣唐使がもたらした大量の漢籍が生かされた。また、空海が著した『文鏡秘府論』は、六朝・唐代の詩論書を多数引用し、その中には中国ですらでに散逸した書物もあり、資料的価値が高い。また円仁『入唐求法巡礼行記』は各地を巡礼した記録であり、唐代の社会、経済、仏教などについて詳細に書き留めている。

平安時代には『白氏文集』が大流行し、『源氏物語』や『枕草子』にも影響を与えた。例えば『源氏物語』の「桐壺」は、白居易「長恨歌」を意識しており、「須磨」では左遷された光源氏が白居易の詩句「二千里外故人心」(八月十五日夜禁中独直、对月憶元九)と朗誦し、周

ら儒者に移る。出版技術の発達によって、漢籍の和刻本が数多く出版されるとともに、漢詩集の刊行が容易になり、漢詩の制作人口が飛躍的に増加した。蘇軾や黄庭堅などの宋人の別集や『三体詩』『古文真宝』が版を重ね、寛永年間以降は『杜律集解』が流行した。これは杜甫の律詩の選集であり、松尾芭蕉の愛読書とされる。その後、『唐詩選』が爆発的に流行し、おびただしい版種が刊行された。

この時代、四六駢儷文が否定され、秦漢の散文やそれに倣った韓愈、柳宗元の古文が文章の規範となった。また、白話小説の『水滸伝』が流行し、『笑林』『笑府』などの笑話集が落語に題材を提供している。「饅頭こわい」は『笑府』に見える。三遊亭円朝「牡丹灯笼籠」は瞿佑『剪灯新話』「牡丹灯籠」に材を得ている。

第四の明治の担い手は、一般の人々や文学者である。明治維新以降、日本は西洋文明の吸収に力を注いだため、中国文学の影響は相対的に少なくなつたが、漢詩を作る人は多かつた。例えば明治期の新聞には漢詩の投稿欄があり、漢詩投稿雑誌が二〇種以上刊行されたことは、当時の作詩人口の多さを物語る。文学者のなかでも正岡子規・夏目漱石らが漢詩を

文学における日中のかかわり



石村貴博
専修大学

りの涙を誘った。また、『枕草子』では雪が降り積もつた日、中宮定子から「香炉峰の雪いかならむ」と尋ねられ、清少納言が白居易の詩句「香炉峰の雪は簾を撥けて看る」(「香炉峰下、新卜山居、草

作り、森鷗外は留学日記を漢文で書いている。大正以降は、中国文学に対する関心が薄れていったが、中国文学に取材した小説は数多い。芥川龍之介「杜子春」は唐代伝奇の「杜子春伝」、「酒虫」は『聊斎志異』。「酒虫」、「黄梁夢」は沈既濟「枕中記」に基づき、太宰治「清貧譚」は「聊斎志異」。「黄英」に材を得た。中島敦「山月記」は「人虎伝」に、「名人伝」は「列子」。「湯問」に、「弟子」は「論語」や「孔子家語」などに基づく。

日清戦争以後、日中の文学のかかわりが大きく変容する。日清戦争以前は、日本が中国から影響を受けることがほとんどだったが、日清戦争以後は、日本が中国に影響を与えることが多くなる。その契機は、日清戦争の後、一八九六年から中国人の日本留学が始まったことだ。その中には魯迅や周作人、郭沫若など、帰国後、中国文壇の中心的存在になった人物もいる。魯迅は、「狂人日記」「阿Q正伝」で知られる中国近代文学の祖であるとともに、日本文学をはじめとする外国文学の紹介者でもあった。弟の周作人と共訳した『現代日本小説集』(商務印書館 一九二三年)では、魯迅は夏目漱石、森鷗外、芥川龍之介の短編を訳し、魯迅

堂初成、偶題東壁」)をふまえて簾を高々と巻き上げた(第二九九段。藤原公任「和漢朗詠集」に収められた白居易の詩は、これらの詩句を含めて一四〇首近くに及ぶ。同書収録の中国の漢詩文の過半を占め、当時の白詩尊重の風潮を物語る。菅原道真は白居易の影響を強く受けつつ、独自の格調高い詩風を確立した。

第二の鎌倉・室町時代になると、担い手が貴族から禅僧に移る。鎌倉末期から江戸時代にかけて、五山の僧が制作した漢詩文である五山文学が中心となる。禅僧たちは仏教の研究や中国文学の講義を行い、講義録の「抄物」が多数伝わる。講じられたのは『三体詩』『古文真宝』や韓愈、柳宗元の文、杜甫、蘇軾、黄庭堅の詩などであり、古文と宋詩が尊ばれた。詩は義堂周信、絶海中津、雪村友梅が優れ、中国の詩と比べても遜色が無い。なかでも絶海中津は、明の太祖朱元璋に謁見して詩の応酬を行い、その名声を確立した。また、五山の禅院などから出版された五山版には、禅籍のほか、『杜工部詩集』『唐柳先生文集』や現存最古の『論語集解』である正平版『論語』などがある。

第三の江戸になると、担い手が禅僧か訳を目にした芥川は、自分の心情がはっきり表れていると評価した。

魯迅は日本の文学者にも愛され、太宰治は魯迅「藤野先生」をもとに「惜別」を書き、佐藤春夫は増田渉との共訳で『魯迅選集』(岩波文庫 一九三五年)を刊行した。大江健三郎は母親から贈られた『魯迅選集』を愛読し、二〇〇〇年の訪中時にも「魯迅は二十世紀アジアにおいて最も偉大な作家」と発言している。

また、魯迅の「故郷」は一九五三年、教育出版の『中学国語(総合)三の下』に採録されたのはじまり、一九七二年には中学国語教科書の出版に携わる五社すべてが「故郷」を採録するに至り、現在に及んでいる。四〇年以上にわたって日本人のほぼ全員が中学生の時に「故郷」を読んできたことになる。

現在、中国で最もよく知られた日本人作家は村上春樹だろう。中国では一九八五年に初めて翻訳され、一九九〇年代後半以降、中国のみならず台湾、香港などでも幅広い支持を得ている。特に『ルウエイの森』が最もよく読まれている。中国人作家では田原(一九八五)が村上春樹から影響を受けたことを公言している。